

日山協自然保護ニューズレター (平成 26 年秋号)

発行日 平成 26 年 11 月 5 日 発行元 公益社団法人日本山岳協会自然保護委員会

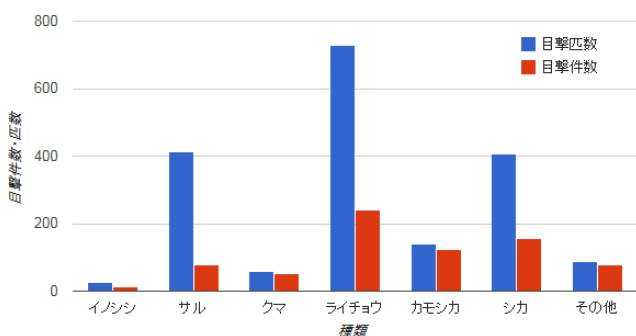
山の野生鳥獣目撃レポート

山岳団体自然環境連絡会（日本山岳協会ほか6団体）が運営するこのプロジェクトは、引き続きレポートを受け付けております。

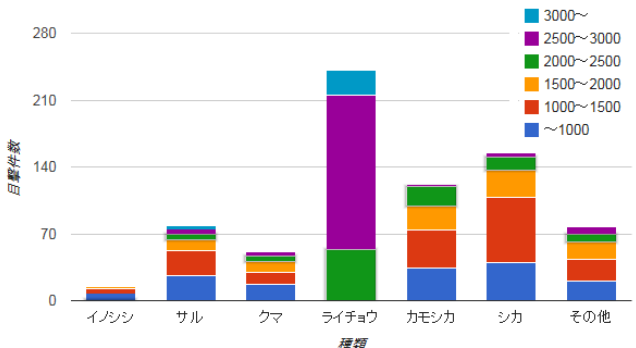
東北・北海・中国・四国・九州からの投稿促進を期待しております。

- 1) ホームページへのアクセス
(2014/4/1~2014/10/31の調査)
アクセス数：1032件 閲覧ページ数：3,095件
アクセスの地域割合：東京30%、大阪11%、
神奈川7%、愛知6%、埼玉(5%)
- 2) 累計レポート件数 (2009/4/1~2014/7/31)
750件
- 3) 集計結果
詳しくは：ホームページにて公開中です。

目撃件数・匹数 種類別分布



標高別・野生鳥獣 目撃件数分布



(山の野生鳥獣目撃レポートホームページ)

www.jma-sangaku.or.jp/conservation/yaseichoju/



第二回山と自然の聖地の集い

平成 26 年 9 月 12 日 (金) 18 : 00~20 : 00、東京新橋で、第二回「山と自然聖地の集い」が開催され 30 名が聴講した。この日の講師は高橋進氏 (共栄大学教授) から「聖なる山と保護地域、そして富士山世界文化遺産」と題した講演を約 1 時間聴講した。

氏の講演予稿から抜粋して、概要を以下に記す。

国際学会での研究発表のために訪れたブータンでは、現在でも自然への信仰が生活の中に息吹いていた。自然への信仰、特に聖なる山とその保護地域制度について、私が研究対象として関わってきた世界と日本の事例を紹介し、今後の山岳地の自然保護について参加者の皆様とご一緒に考えてみる。

国立公園などのような近代的な保護地域制度の設立よりもはるか以前から、実質的に自然を保護する仕組みや習わしは、日本のみならず世界に多数存在してきた。そのひとつに、自然の精霊や先祖、あるいは土地や水の保全に関連した自然の聖地がある。アジアやアフリカにおいては、村落共同体の聖地あるいは禁忌の場所として存在してきた。

古くから地元において信仰対象となってきた山岳地が世界遺産 (文化遺産または自然遺産) に登録されている例も多い。このなかには、トンガリロ山 (トンガリロ圏

立公園) (ニュージーランド)、ウルル=カタ・ジュタ国立公園 (オーストラリア)、峨眉山 (中国) などのように、文化遺産と自然遺産の両方の登録基準を有する複合遺産として登録されているものも少なくない。

例えば、山地・山岳名を冠した植物も多い。山地・山岳名に関する接頭辞は 65 分類で、植物種数の多いものをあげると、イブキ (伊吹山) (22 種)、フジ (富士山) (19 種)、ハクサン (白山) (18 種) などとなる。これらの山岳名のうち、96.9%が国立公園などの保護地域に指定されており、その多くは古来の山岳信仰の対象地であった。

2013 年 6 月には、富士山が「信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録された。縄文時代には既に富士山を遥拝していたと考えられる遺跡も発見されている。富士山は、①信仰の対象②芸術 (文学・美術などのモチーフ) ③意匠 (商標など) として多く日本人の生活文化にかかわってきており、誰もが日本一の名峰と認める。富士山信仰という固有の文化的伝統や、景観の美しさ、普遍的な意義を持つ芸術作品の点から評価を受けた。

我が国における登山は、生活や信仰との関わりとしての登山から、近代のスポーツ・レクリエーション登山へと変遷してきた。私が全国組織の会長を務めている「巨樹」も、信仰の対象を含め、人々の生活との深い関わりの中で保存されてきた。一方で現代では、落ち葉問題などから、保存にさえ反対する動きもある。聖なる山の自然保護のために、現代流の登拝と遥拝など、聖なる山の新たな価値と役割をみんなで考えてみたい。

(この講演を聴いて)

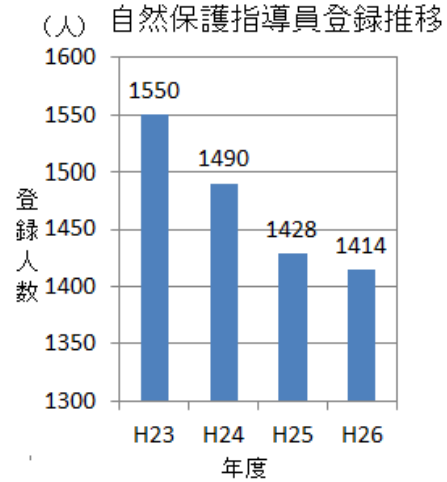
「自然」という文字から我々の持つ概念が連想できるものでない。「自然」は古くからある言葉で、「自ずから然 (しか) あること」(おのずからそうあること。本来そうであること。) の意味で用いられてきた。明治時代になって、西洋文化の流入とともに、「人間の手を加えることなく、本来のままの姿であること」をあらわすのに「nature」という言葉が伝わり、その訳語にとして使われてきたのだと思われる。つまり、自然とは森や山や空などの事物を表す言葉ではないのは、日本にはそうした意識が不要なほど身近なものであったとも考えられる。八百万 (やおよろず) の神といわれている日本の精神文化が、「森羅万象」の事物を大切に伝えられてきたことに目を向けてみたい。(松)

平成 26 年度自然保護指導員登録更新受付状況

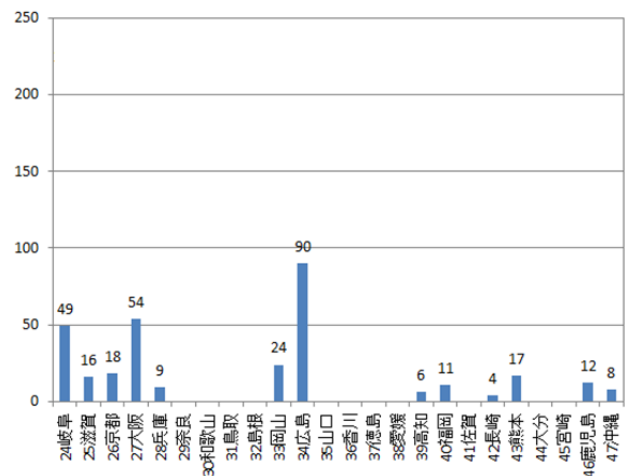
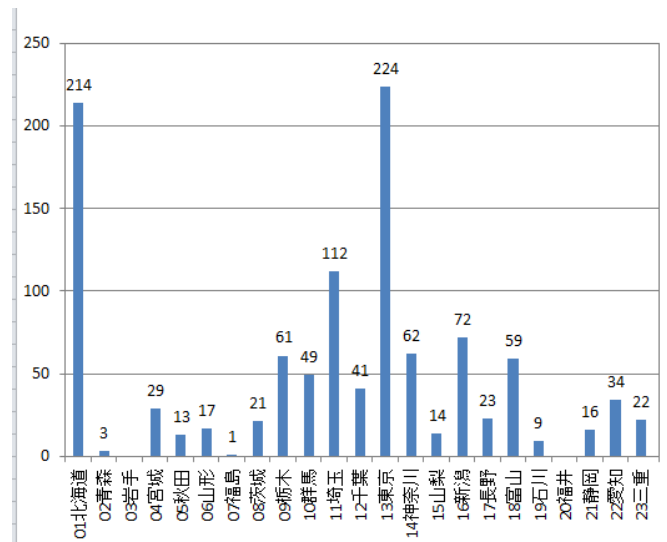
平成 26 年度自然保護指導員は 10 月 30 日現在で、1414 名の登録となった。内訳は、新規 38 名、更新 124 名、継続 1252 名となった。

自然保護指導員の登録数は年々右下がりの状況にあり、この状況の改善に向け、より一層のご協力をお願いします。

自然保護指導員の年別の登録推移



加盟団体別の自然保護指導員の登録



平成 26 年度関東地区山岳連盟自然保護の集い

この集いは、自然保護常任委員を主体に出身都県の山岳連盟での自然保護委員会の情報交流と活動の現状見聞することで、互いの連携を深めて、平素の自然保護活動に資することを目的に年一度の持ち回りで開催してきた。本年度は栃木県が担当で実施したので概要を次に記す。

栃木県山岳連盟自然保護委員会のもと、那須岳の麓で、一都 7 県の常任委員を含む 38 名の参加者を得て行われました。「自然を尊び愛し、親しもう」と言う自然保護憲章を尊重する事を目的とした、関東地区の自然保護常任委員の方々との勉強会、交流会に参加するために、集まった次第です。

初日の会場是那須小学校に於いて、自然保護常任委員長、石倉氏、栃木岳連副会長、渡部氏の開会の挨拶に始まり、「那須の今昔」大高 登氏、「かたりべ」斉藤留美子氏、「奥の細道・芭蕉」蓮實淳夫氏の各氏による講演を拝聴した次第です。

大高氏は「ニューおおたか旅館」のご主人で那須で生まれ育ち、山岳救助隊、又、登山道の整備など地元の活動にご尽力なさった方でもあります。那須の御用邸が大正 15 年に出来ましてから、最近では皇太子ご一家と共に那須岳に登っておられるようです。語り部による那須に現れた「九尾のキツネ」と殺生石、那須与一の話など不思議な物語で、温泉神社(ゆぜんじんじゃ)と共に様々な話が、語り継がれて現在に至っているようです。

最後に、芭蕉が旅をした深川から大垣まですべてを 8 年かけて踏破した俳人蓮實氏より、芭蕉の解説と栃木の山と俳句なども紹介していただき、大変、勉強になり、興味深く聞かせていただきました。

二日目は 3 班に分かれての山岳研修と言う事で、私は南月山コースに参加してきました。那須岳と言う総称の中の本峰は「茶臼岳」ですがこの南月山(なんげつやま)がすぐ隣にあることから、茶臼岳を別称「月山」と呼ばれる方もおられるようです。牛ヶ首、南月山方面からの眺望は皇太子一家のお気に入りだった様で、度々訪れておられるようです。大丸駐車場より那須山岳会のガイドの方々の引率により総勢 12 名、那須の歴史、産業、風習など色々な話が聴けて大変参考になりました。ハードな山登りも良いですけど、温泉付きのこの様な山も良いですね。

参考までに、登山管理センターによると、御嶽山による影響か、登山届がいつもの 3 倍ぐらいに増えたそうです。ちなみに茶臼岳の噴火レベルは 2 だそうです。

最後にこの度の幹事団体、栃木山岳連盟、那須山岳会の方々には大変お世話になりました。手塚さんご夫婦には最後までお世話かけてしまい、感謝しております。下山後のトン汁はグッドでした。ご馳走様。(西)



集いに参加したメンバー

第 15 回ライチョウ会議 東京大会

11 月 2 日東京上野の東京国立博物館平成館大講堂(395 名収容)にて第 15 回日本ライチョウ会議公開シンポジウムが開催された。会場をほぼ埋め尽くすほどの聴講があり、関心の高さを伺わせて。

この日の公開シンポジウム「ライチョウのために動物園ができること」とのタイトルで、ライチョウの生息保全に向けた基調講演 2 題と各界の識者によるシンポジウムが夕刻午後 1 時間半から 4 時半までの 3 時間、中身の濃いシンポジウムが展開された。

ライチョウ(ニホンライチョウ)は日本国指定の特別天然記念物であり、2012 年には環境省のレッドリストで、絶滅の危険が増している「絶滅危惧 2 類」から、近い将来に野生での絶滅の危険性が高い「絶滅危惧 1B」に指定された。

平成 26 年 4 月 24 日には、環境省は、第一期ライチョウ保護増殖事業実施計画を公表し、生息域内保全に係る取組(生息状況調査、減少の影響要因調査及び対策等)と、生息域外保全に係る取組(飼育下繁殖の技術確立等)を、相互に情報共有を図りながら、連携して実施するとした。

在来の保護を主体とする取組から、保全を主体とする取組に転換したことを示す。域内保全の一例として、ケージ保護による捕食者からの防御に人手を介在させる実用化研究が乗鞍岳でされ始めた。在来まで生態調査で、孵化の 6~7 月から成鳥と同じくらいまで成長する 9 月頃までの間の死亡率(捕食被害が原因)で死亡する率が 7 割ほどと高いことから、この間をケージに保護して捕食者や梅雨の冷氣から守るとの考えである。一方域外保全というのは、動物園の飼育技術を利用して、卵の孵化から雛や成鳥の保育、繁殖までの技術確立を行い放鳥するというもの。域外保全については、既に研究が進められており、別亜種スバルライチョウで蓄積されてきた飼育・繁殖技術の評価を踏まえ、ライチョウの飼育下個体群の確立及び維持に必要な技術確立方針、実施工程及び実施体制の検討を行い、ライチョウの飼育下繁殖の取組に着手し、飼育・繁殖技術と実施体制を確立する。スバルライチョウは、北極圏のノルウェーに生息するライチョウの亜種なので、日本に生息するライチョウに比べて白い羽(冬羽)の時期が長い種類で、2008 年に東京都恩賜上野動物園がノルウェー・トロムソ大学から、交尾後の雌が生んだ卵を導入し、人工孵化させて開始されて実績を踏んでいるという。

今回のシンポジュームのタイトルが「・・・動物園ができること」となっているのは、こうした動物園の持つ環境保全に果たす役割が非常に大きくなっていることを端的に示すものである。



ライチョウ生息保全の考え方

(この聴講して)

ライチョウに影響するものと考えられている生態系の問題に、捕食動物(ハシブトガラス、キツネ)の高地への移動と、食糧問題に及ぶ動物の高山への移動(シカ、サル、イノシシ)が挙げられている。例えば登山者の持ち込む残飯ゴミなど移動の誘因となっていることも事実であるからテイクインテイクアウトなども心がけたり、「野生鳥獣目撃レポート」に参加したり、登山者の立場で簡単にできることをもう一度考えてみたい。

今や自然保護には環境保全の考え方が求められており、適切な自然への関与を行う行動について考えたい。

アジア山岳連盟(UAAA)創設1994年

11月にはアジア山岳連盟の創立20周年記念を迎え広島で各種行事が予定されています。自然保護委員総会もその一つです。神崎会長からUAAAの記事を頂戴しましたので以下に掲載いたします。

1932年に国際山岳連盟(UIAA)はフランスのシャモニーにおいて発足した。日本は、ドイツ山岳会(DAV)の入会要請の手紙がきっかけとなって1967年に加盟。8年間は日本山岳会が日本を代表する加盟団体として総会等に出席し、その後日本山岳会と日本山岳協会の話合いのなか、日本山岳協会が日本の国際窓口として加盟団体に移行した。アジアでは初めての加盟国ということ、また登山の歴史、実績、伝統が認められ理事国として運営にたずさわるなか1992年日本の松本で国際山岳連盟の総会を開催した、アジアでの総会開催ということで、アジア諸国の加盟団体が多く出席し、アジアロビーでアジアにおける登山活動の話が真剣に話され、二年間の準備期間において、1994年韓国でアジア山岳連盟の発足総会が開かれた、初代会長に当時の斎藤一男日本山岳協会会長が就任しアジア山岳連盟が出発した。18か国21団体が加盟しているが、スポーツクライミングの普及に伴って設立した山岳団体も少なくなく、登山に対する歴史、実績、活動内容の差が大きく画一的活動にはかなりの難しい問題がある。加盟費は入会費500US\$、年会費は通常会員は300US\$、理事国は500US\$を納める。

今年は20周年を迎え、記念行事と総会を広島での開催要請をカトマンズ総会でうけて日本の広島での開催準備を整えることになった。アジア各国の日本の登山界への期待も大きく、この20年間、日本がオピニオンリーダーとしてアジアの登山界を引っ張ってきたことも誇りとするところだが、今回のアジア山岳連盟創立20周年広島開催は日本の登山界挙げて歓迎し、アジアの国々の期待にこたえ、アジア登山界に寄与し、また日本の登山界の国際理解を高める機会と捉えたい。出席各位の国際理解と国際交流に期待させていただきます。

(神崎忠男)

注：神崎会長のご好意により掲載しました。

お知らせ

◆自然保護指導員養成出前講座

自然保護指導員などを対象とした養成研修会へ、日本山岳協会自然保護常任委員を講師として派遣いたします。ご希望がありましたら委員会(本書末尾に記載)へお知らせください。

会議等

◆自然保護常任委員

平成26年8月21日
平成26年9月25日
平成26年10月9日

◆山岳団体自然環境連絡会

平成26年10月17日
平成26年9月11日
平成26年5月23日
平成26年6月27日
平成26年7月31日

◆山と自然の聖地研究会

平成26年9月12日

予定

◆日山協主催指導員研修会

平成26年11月8日 代々木



編集後記 3回目の発行に何とかこぎつけた。今秋には那須で関東地区山岳連盟自然保護の集いを開催。那須温泉にも山岳信仰にまつわるいろいろなストーリーを見聞することもできた。山の持つ文化(精神文化)に因らずも接する機会を得た。山は日本人の心のふるさとであろう。(松)

発行元

公益社団法人日本山岳協会 自然保護委員会
〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館
☎ 03-3481-2396 📠 03-34891-2395
HP www.jma-sangaku.or.jp
Blog <http://mountprotection.sblo.jp/>

発行日 平成26年11月5日

発行番号 2014年秋号 (2014-11 publ)